

真実なことばによって生んだ(1:18)

ヤコブの手紙における「聞くこと」「語ること」「行うこと」

永井創世

キリストと世界 29 号抜刷 2019.3.1

## 真実なことばによって生んだ (1:18)

### ヤコブの手紙における「聞くこと」「語ること」「行うこと」

永井創世

(東京基督教大学大学院神学研究科博士後期課程)

#### はじめに

ヤコブの手紙は、1章22節「みことばを行う人になりなさい」(新改訳2017)や、2章17節「信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです」(新改訳2017)に典型的なように、倫理的教えや実践を強調する特徴で知られる。しかしながら、手紙が「語ること (speech)」について多く言及している点 (1:19-20・26, 3:1-12, 4:11-12, 5:9・12等) はあまり注目されていない<sup>1</sup>。ペイカーはこの点に焦点を当てた研究の第一人者で、ヤコブの手紙と古代中近東の諸文献との比較を通して、その共通性と区別性を描き出した<sup>2</sup>。彼の研究は「語ること」に関する教えの全体像を捉えるのに有益である。しかし、「聞くこと」「語ること」といった関連する他の主題は十分に考慮しておらず、手紙に一貫する全体的な思想を捉えきれていない。

本稿は、著者の「語ること」に関する言及を出発点としながら、「聞くこと」「行うこと」といった関連する他の主題との関係を捉える鍵が *λόγος* (「ことば」を意味するギリシア語) にあることを示す。そして、著者が *λόγος* の「真実 (*ἀλήθεια*)」という性質を強調し、「ことば」に対して常に実体を伴う真実性を要求していることを示す。換言すれば、それは「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性の要求であり、本稿は、それが手紙に一貫する全体的な思想であることを示す。

- 
- 1 Richard Bauckham, *James: Wisdom of James, Disciple of Jesus the Sage*, New Testament Readings (London and New York: Routledge, 1999), 203.
  - 2 William R. Baker, *Personal Speech-ethics in the Epistle of James* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1995).

## 1 研究背景

本論に入る前に、本稿の研究背景について述べる。それにより、本稿のねらいや意義をより明確にすると共に、本稿における釈義の限界についても述べておきたい。

### (1) ヤコブの手紙とイエス伝承との関連性

ヤコブの手紙には、イエス伝承との関連性をめぐる絶え間ない議論がある<sup>3</sup>。ヤコブの手紙において、「イエス」という直接的な言及はわずか2箇所であり(1:1、2:1)、パウロ書簡に顕著な十字架と復活への言及も皆無である。しかしながら、この手紙の教えは福音書に記されるイエスの教えと類似しており、かねてから、何らかのかたちでイエス伝承に依拠していることが指摘されてきた。問題は、その関連性の度合いについて、学者達の意見が大きく異なっている点である。

クロッペンボーグが指摘するように、学者達を悩ませる要因が主に3つある<sup>4</sup>。第一に、著者は旧約聖書を「引用」と分かるかたちで引用しているにも関わらず(2:8・11・23、4:5・6)、イエス伝承については、それと分かる明確な表現が一切ない。そればかりか、イエスが権威者であると言及さえない。第二に、イエス伝承との関連が指摘される箇所に、福音書の記述との言葉上的一致があまりない。第三に、それにも関わらず、特に山上の説教と多くの主題が類似している。

以上に加えて、ヤコブの手紙の著者と年代に関する議論も問題に拍車をかけている。手紙冒頭の「神と主イエス・キリストのしもべヤコブ」(1:1)が、イエスの兄弟ヤコブを指すとの意見は多くの学者に支持されているものの、手紙を偽典とみなし、執筆年代を比較的后代にみる学者は少なくない<sup>5</sup>。決定的な証拠がない事実はい

3 Alicia J. Batten and John S. Kloppenborg, "Introduction" in *James, 1 and 2 Peter, and Early Jesus Traditions*, Library of New Testament Studies 478, ed. Alicia J. Batten and John S. Kloppenborg (London & New York: Bloomsbury T&T Clark, 2014), xiv-xv.

4 John S. Kloppenborg, "The Reception of the Jesus Traditions in James," in *The Catholic Epistles and the Tradition*, Bibliotheca Ephemeridum Theologicarum Lovaniensium 176, ed. Jacques Schlosser (Leuven: Peeters, 2004), 93-94.

5 より詳しい議論は Dale C. Allison, Jr., *James: A Critical and Exegetical Commentary*, International Critical Commentary (New York: Bloomsbury T&T Clark, 2013), 3-32. を参照。

ずれの立場の学者も認めるところであり、史的イエスとの関連性についての共通理解は少ない。

## (2) 問題の解決に向けての近年の動向

以上のようなヤコブの手紙の特徴は、研究者たちの関心を資料問題へと集中させてきた<sup>6</sup>。しかし、過去の研究は、著者の用いた資料を特定することの困難さを明らかにするものであり、実際は、口伝を含む諸々の伝承が複雑に絡み合っていると考えられる<sup>7</sup>。結局のところ、資料の研究は、手紙におけるイエスに関する直接的な言及の少なさや、福音書との言葉上の一致が比較的少ない点について、満足のいく説明を提供してはいない<sup>8</sup>。

そうした中、近年、ヤコブの手紙におけるイエス伝承の提示の仕方に注目し、それを著者の「創造性」として捉える研究の動きがある。ボウカムは、主にベン・シラの知恵との類比から、ヤコブの手紙の著者がユダヤ教の賢者の伝統（知恵文学の伝統）にのっとり、自分の師であるイエスの知恵を自分のものとし、イエス伝承を「引用」するのではなく、むしろ、ほのめかしながら再提示していると主張する<sup>9</sup>。クロッペンボーグはボウカムの研究を肯定的に評価しつつ、自身はヘレニズムの修辞学の背景からの説明を試みる。彼によれば、ヤコブの手紙の著者は「アエムラティオ (aemulatio)」と呼ばれる修辞技法を用いている。それは、よく知られた格言などを、新しい状況に適用して言い換える修辞技法である<sup>10</sup>。

6 特にヤコブの手紙と Q 資料との関連性がこれまで盛んに論じられてきた。しかし、Q 資料仮説を前提とする議論には限界がある。詳しい研究史は Kloppenborg, “The Reception of the Jesus Traditions in James,” 95–111. を参照。

7 Bauckham, *James*, 31.

8 Kloppenborg, “The Reception of the Jesus Traditions in James,” 112.; Dale C. Allison, Jr. “The Audience of James and the Sayings of Jesus,” in *James, 1 and 2 Peter, and Early Jesus Traditions*, Library of New Testament Studies 478, ed. Alicia J. Batten and John S. Kloppenborg (London & New York: T&T Clark, 2014), 58–63.

9 Bauckham, *James*, 30, 91. Richard Bauckham, “Wisdom of James and Wisdom of Jesus,” in *The Catholic Epistles and the Tradition*, Bibliotheca Ephemeridum Theologiarum Lovaniensium 176, ed. Jacques Schlosser (Leuven: Peeters, 2004), 75–92.

10 Kloppenborg, “The Reception of the Jesus Traditions in James,” 141.

ボウカムもクロッペンボーグも共通して、ヤコブの手紙におけるイエス伝承の提示の仕方の「創造性」を説明する有力なモデルを提供している<sup>11</sup>。しかし、彼らが採用する資料がヤコブの手紙とどの程度実際に関係しているのかについて、確かな証拠はない。ベン・シラの知恵は、ヘブライ語版が紀元前200-175年頃に執筆されたと一般に考えられているため<sup>12</sup>、時代の開きは決して小さくない。「アムラテイオ」も、当時どれほど一般に習得されていたのかは定かではなく<sup>13</sup>、ヤコブの手紙の著者に関してはなおさらである<sup>14</sup>。そのうえ、彼らの結論は、イエス伝承の提示の仕方の背景をある程度説明し得るとしても、それらを用いる積極的な理由を十分に説明できていない。

### (3) ヤコブの手紙における「語ること」に注目する意義と本研究の限界

そこで筆者が注目するのは、手紙自身が述べる「語ること」に関する言及である。本稿の「はじめに」で述べたように、ヤコブの手紙における「語ること」に関する関心の高さは顕著な特徴のひとつである<sup>15</sup>。この特徴が、著者自身の手紙の語り口と無関係とは思えない<sup>16</sup>。むしろ、著者自身が手紙において、自らの「語ること」

- 11 特に、かねてからしばしば指摘されてきたヤコブの手紙と知恵文学との関連性の中でイエス伝承の提示の問題を論じるボウカムの研究には一定の説得力がある。Bauckham, *James*, 30. 中間時代の知恵文学にヘレニズムの影響がその形態と概念に色濃く現れることを鑑みれば、クロッペンボーグの主張はボウカムの主張に必ずしも対立するものではなく、2つの背景が手紙を特徴づけている可能性もある。
- 12 M. Phua, "Sirach, Book of," in *Dictionary of the Old Testament: Wisdom, Poetry and Writings*, ed. Tremper Longman and Peter Enns (Downers Grove: IVP Academic; Nottingham, England: Inter-Varsity Press, 2008), 720.
- 13 Kloppenborg, "The Reception of the Jesus Traditions in James," 122.
- 14 フォスターも同様の疑問を呈している。Paul Foster, "Q and James: A Source-Critical Conundrum," in *James, 1 and 2 Peter, and Early Jesus Traditions*, Library of New Testament Studies 478, ed. Alicia J. Batten and John S. Kloppenborg (London & New York: T&T Clark, 2014), 20.
- 15 Bauckham, *James*, 107.
- 16 当時の習慣としては、手紙が口述筆記で書かれ、朗読されるのが当然であった。Harry Y. Gamble, *Books and Readers in the Early Church: A History of Early Christian Texts* (New Haven & London: Yale University, 1995), 95-96.

に関する教えを実行し、表していると考えの方が自然である。そのうえ、イエス伝承の提示の仕方の特徴を、知恵文学やヘレニズムの修辞技法の背景の中にはなく、著者自身の思想の中に見出そうとすることは、より理にかなったアプローチである。しかし、そのように著者の思想と語り口（提示の仕方）の関係性を論じる研究はほとんど見当たらない<sup>17</sup>。

そのため、ヤコブの手紙における著者の「語ること」に関する考察は、ヤコブの手紙とイエス伝承の関連性をめぐる問題に対して重要な意義を持っている。ただし、本稿は上記のようなヤコブの手紙とイエス伝承の関連性の議論を研究背景とするため、テキストの釈義においては、イエス伝承との関連性を前提とした議論はしない。すなわち、仮にイエスの教えとの関連性が示唆される箇所であっても、イエスの教えをそのテキストの思想的背景として論じることはしない。その点において、本稿の釈義は一定の限界の下にあると言わざるをえないが、むしろ、あえてそうすることによって、イエス伝承との関連性の問題に貢献することを目指すものである。そこで、この問題に関する考察は、今後の課題として、本稿の結論をふまえて最後に簡潔に述べることとする。

## 2 ヤコブの手紙における導入部の重要性

ヤコブの手紙で「語ること」について初めて直接的に言及されるのは1章19-27節である。ベイカーがその箇所を「スピーチ倫理に関する基本原理」と捉えるように<sup>18</sup>、そこには「語ること」に関する著者の基本的な思想が導入的に述べられている。しかし、そこでは「聞くこと」「行うこと」といった主題も同時に言及されている。ヤコブの手紙の構造上、1章は手紙の導入部にあたり、手紙全体の思想を読み解くうえで重要な位置を占める。ヤコブの手紙はかつて、倫理的伝承の無作為な羅列と捉えられることが多く、学者達の間では、注意深い構造や思想の一貫性の存在を認

---

17 唯一確認できたものとして Carol Poster, "Words as Works: Philosophical Protreptic and the Epistle of James," in *Rhetorics for a New Millenium*, ed. David Hester (New York: T&T Clark, 2010), 235-53. がある。

18 Baker, *Personal Speech-ethics in the Epistle of James*, 3.

めない見解が支配的であった<sup>19</sup>。しかし、近年そうした見解は弱まり<sup>20</sup>、反対に、さまざまな構造が提案されるようになっていく。詳細に関する学者達の意見に一致はないが、1章が導入部として重要である点では概ね一致している<sup>21</sup>。そこでは、「語ること」に限らず、2章以下の手紙の主要部で展開される他の主題が先取りされている<sup>22</sup>。そのため、1章における「語ること」に関する言及と、同時に言及される「聞くこと」「行うこと」といった主題との関係性を明らかにすることは、手紙に一貫する全体的な思想を読み解くうえで重要な意味を持つ。

### 3 導入部の構造の複雑さ

導入部である1章にはさまざまな主題がみられるが、その構造が複雑であることから、主題相互の関係性や、著者の全体的な思想が不明瞭と考えられてきた。特に、

19 代表的なのはディベリウスである。彼はヤコブの手紙の様式を「パラネーゼ（倫理的伝承の寄せ集め）」とみなして、個々の伝承の間の思想的連続性を否定した。Martin Dibelius, *A Commentary on the Epistle of James*, ed. Heinrich Greeven, trans. Michael A. Williams, Hermeneia (Philadelphia: Fortress, 1976), 1-11.

20 要因として、ディベリウスの主張した「パラネーゼ」に関する前提が否定された影響が大きい。現在、「パラネーゼ」は文学様式ではなく、さまざまな文学様式に当てはめられる個別伝承の一類型にすぎないことが指摘されている。Luke Timothy Johnson, *The Letter of James*, The Anchor Yale Bible (New Haven and London: Yale University, 1995), 19. 辻学『ヤコブの手紙』（新教出版、2002年）、9頁

21 ただし、導入部の範囲は議論の余地がある。構造の研究史は、テラーによるものが詳しい。Mark Edward Taylor, *A Text-Linguistic Investigation into the Discourse Structure of James*, Library of New Testament Studies (London: T&T Clark, 2006), 8-34. 彼は研究史を概観し、まとめとして次の4点を指摘する。(1) ディベリウスの「パラネーゼ」に関する前提が学者達の間で破棄されている。(2) 学者達の間には構造の詳細にまでは意見の一致はないが、手紙全体が首尾一貫しているとの意見の一致が広まりつつある。(3) 学者達の多くは、1章が手紙の構造を考えるうえで鍵であると考えている。(4) 2:1-13や2:14-16、3:1-12といった主要な区分は明瞭であり、統一的な主題を取り扱っているとの意見の一致がある。

22 ボウカムは、1章の主題や語彙が2章以降のどの箇所に見出されるのかの大まかなりストを作成しており有益である。Bauckham, *James*, 71-72.

1章は掛詞や反復が多用されているため<sup>23</sup>、個々の言及が論理的・主題的に結びついているというよりも、むしろ、言葉遊びによって「表面的に」結びつけられていると考えられる傾向があった。その構造は、一本の糸のように各主題が連結・展開されているというよりは、むしろ、複雑に編み合わされるような様相を呈している。

学者達の幾人かは、その複雑な構造を詳細に分析し、明らかにすることを通して、主題相互の関係性や全体的な思想を明らかにしようと試みる。しかし、ボウカムは「一貫した思想」と「注意深く構成された構造」が区別されるべきだと指摘し、著者はあくまでルーズな構成の中に「一貫した思想」を表していると述べる<sup>24</sup>。この主張は、構造分析を通してヤコブの手紙の全体的な思想を見出そうとする試みの限界を正しく指摘している<sup>25</sup>。ジョンソンも同様の問題意識を持っており、特に、現代の文学理論を用いた複雑な構造分析が、口頭で伝えられていた当時の手紙の分析には適さないことを指摘している<sup>26</sup>。

そこで、本稿は1章の構造に関する議論とは一定の距離をとる。そして、あくまで主題に着目し、編み合わされるように関連し合う構造の中で、それらを結び合わせる鍵となる語に注目し、「語ること」と、「聞くこと」「行うこと」といった関連する他の主題に一貫する全体的な思想を明らかにしたい。

---

23 事実、1章における掛詞や反復は枚挙にいとまがない。ὕπομονήν / ὑπομονή (1:3-4)、λείπόμενοι / λείπεται (1:4-5)、αἰτείτω (1:5-6)、πειρασμοῖς / πειρασμόν / πειραζόμενος, ἀπειράστος, πειράζομαι, πειράζει, πειράζεται / πειράζεται (1:2, 12-14)、ἀποκύει / ἀπεκύησεν (1:15, 18)、δοκίμιον / δόκιμος (1:3, 12)、λήμψεται (1:7, 12)、τέλειοι / τέλειον (1:4, 17, 25)、ἀδελφοί μου ἀγαπητοί (1:16, 19)、λεγέτω / λόγῳ / λόγον / λόγου (1:13, 18-19, 21-23)、ὀργήν / ὀργή (1:19-20)、κατεργάζεται (1:2, 20)、ἀκοῦσαι / ἀκροαταὶ / ἀκροατῆς (1:19, 22-23)、ποιηταὶ / ποιητής / ποιήσει (1:22-23, 25)、Μακάριος (1:12, 25)、θρησκὸς / θρησκεία (1:26-27)、πατὴρ / πατὴρ (1:17, 27) 等。

24 Bauckham, *James*, 61-62.

25 ただし、ボウカムは手紙と知恵文学との親和性を強調するあまり、構造的特徴や論理的展開をあまり重要視しない。

26 Luke Timothy Johnson, *The Letter of James*, 13-14.



#### 4 ことばの実行者：「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性

これまでほとんど注目されてこなかったが、「聞くこと」「語ること」「行うこと」について述べる1章19-27節の文脈では、すべての主題と関連する *λόγος*（「ことば」を意味するギリシア語）が集中的に用いられている。

- 18節 彼は（神は）願って、ある種の被造物の初穂とするために、私達を真実なことばによって（*λόγῳ*）生んだのです。
- 19節 知っておきなさい。私の愛する兄弟たち。人は誰でも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。
- 20節 なぜなら、人の怒りは神の義を実現しないからです。
- 21節 ですから、すべての汚れやばいこる悪を捨て、あなたがたのたましいを救うことのできる、その植えつけられたことばを（*λόγον*）素直に受け入れなさい。
- 22節 ことばの（*λόγου*）実行者でありなさい。自分自身を欺く、ただ聞く者であってははいけません。
- 23節 ことばの（*λόγου*）聞き手で、なのに実行者でないなら、この人は自分の出生の顔を鏡で見る人のようです。（私訳）

これ以外にヤコブの手紙で *λόγος* が用いられるのは3章2節のみであるため、この箇所での集中的な使用は顕著である。これまでの解釈では、この箇所の *λόγος* は一貫して「神のことば」を指すと考えられ、単に「聞くこと」「行うこと」との関連だけが意識されてきた<sup>27</sup>。しかし、21節以外の *λόγος* は無冠詞であるため、そこに特定の「ことば」を指す意図があるかどうかは曖昧である（この箇所の無冠詞の用法については次項で述べる）。*λόγος* という語自体は、日常生活の「話しことば」も含めたあらゆる「ことば」を指す語であり<sup>28</sup>、実際に3章2節で著者は、人間の「話しことば」を指すのに用いている。1章19節で「聞くこと」だけではなく「語ること」

27 新改訳2017は18節以外を一貫して「みことば」と訳す。新共同訳も18節以外を「御言葉」と訳す。

28 Johannes P. Louw and Eugene A. Nida, *Lexical Semantics of the Greek New Testament: A Supplement to the Greek-English Lexicon of the New Testament Based on Semantic Domains* (Atlanta: Scholars, 1992), 400.

にも合わせて言及していることも踏まえれば、著者がここで、「神のことば」だけではなく、人間の「語ることば」も念頭に置いている可能性は十分にある。

特に22節をこの線で捉えたと、「ことばの実行者 (ποιηταὶ λόγου)」とは、「神のことば」の実行者だけではなく、それに基づいて語り、その語ったことばを誠実に実行する者をも含意する。この場合、22節前半の命令は、聞くにも語るにも「ことばの実行者でありなさい」との命令と解釈できる。換言すれば、それは「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性を要求する命令である。

もちろん、22節後半から25節は明らかに、聞いた「神のことば」の実行者となることを要求している。しかし、22節前半に「語ることば」の実行者となることの要求も含意されていると考えると、この後の文脈に合致する。後に詳述するように、1章26-27節では、自分の舌を制御しない者の宗教が批判され、「語ること」「行うこと」の乖離が問題視されている。また、それに続く手紙の2章以下でも同様の問題意識が見られる。2章1-13節において、著者はえこひいきの問題に言及し、具体例として、金持ちと貧しい者に対する言動の違いを挙げる。著者は、それがキリスト教信仰と律法の教えに反することを指摘しつつ、12節で「自由の律法によってさばかれる者として、ふさわしく語り、ふさわしく行いなさい」(私訳)と述べ、「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性を要求する<sup>29</sup>。続く14節以下でも、信仰が行いを伴うべきことが語られる文脈で、言行不一致の問題がとり挙げられている(2:15-16)。

以上より、1章22節「ことばの実行者」は、第一に「神のことば」の実行者を指すが、同時に「語ることば」の実行者をも含意していると考えられる<sup>30</sup>。著者はここで、λόγοςをキーワードとしながら、「聞くこと」「語ること」「行うこと」について述べており、「ことばの実行者」として、それらが一貫性を持つことを要求

---

29 12節は文法的には「ふさわしく語りなさい」と「ふさわしく行いなさい」という2つの命令である。そのため、必ずしも、語ったことを行うことが要求されているとは限らない。しかし、14節以下は明らかに「語ること」「行うこと」の一貫性を要求しており、文脈上、12節も同様と考えるのが妥当である。

30 既述の通り、ヤコブの手紙の導入部は掛詞や反復によって主題と主題を結び合わせているため、ひとつの表現にいくつかの含意があることは十分にあり得る。

していると考えられる。

では、そのような著者の教えは何に基づくものであるのだろうか。次項ではこの点を、1章18節に注目して考察する。

## 5 真実なことばによって生んだ

「ことばの実行者」として、「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性を要求する著者の思想において、1章18節は重要である。なぜなら、1章18節は *λόγος* に言及する最初の箇所であり、19節冒頭の「知っておきなさい。私の愛する兄弟たち」（私訳）が示唆するように、19節以下は18節を踏まえた言及となっているとみられるからである<sup>31</sup>。

18節 彼は（神は）願って、ある種の被造物の初穂とするために、私達を真実なことばによって（*λόγῳ ἀληθείας*）生んだのです。（私訳）

これ以前の文脈をみると、1章2-15節では「試練」や「誘惑」に対するふさわしい態度が説かれており、特に13-15節では、誘惑によって人間が罪に陥る原因が、あくまで人間の欲望にあることが強調されている。13節には「誘惑に会う時、『神から誘惑された』と誰も言って（*λεγέτω*）はいけない」（私訳）とあり、暗に人間の *λόγος*（*λεγέτω* と同語幹）への牽制がある。この流れの中、16-18節では、神が徹頭徹尾良いものを与える方であることが強調される<sup>32</sup>。そして、その結びで、「（神が）私達を真実なことばによって（*λόγῳ ἀληθείας*）生んだのです」（18節）と述べられる<sup>33</sup>。著者はここで、いわば信者の起源に言及しており、そこに神の「真

31 ただし、19節冒頭「知っておきなさい」が、前後のどちらの文脈と結びついているのかは議論がある。

32 この文脈の人間と神との対比は顕著である。人間は、「欲が孕んで罪を生み、罪が完成されて死を生みます（*ἀποκύει*）」（1:15）が、神は「願って私達を生んだ（*ἀπεκύησεν*）」の（1:18）。Murray J. Harris, *The Second Epistle to the Corinthians: A Commentary on the Greek Text*, The New International Greek Testament Commentary (Grand Rapids: Eerdmans, 2005), 89.

33 属格 *ἀληθείας* は「描写の属格 (descriptive genitive)」と考えられ、主要部 (*λόγῳ*) の性

真なことば」という手段があったことに注意を促している。

多くの学者達は、「真なことば」が具体的に何を指し、「生んだ」という出来事が具体的に何の出来事を指すのかといった議論に陥りがちである。これには主に3つの立場がある。(1)「神のことば」による天地創造の出来事を指す。(2)「律法」による神の民としてのイスラエルの設立を指す。(3)「福音」によるキリスト者の新しい創造を指す。それぞれの立場に一定の根拠があるが、どれも決定的ではない<sup>34</sup>。そのため、3つが重なり合っている可能性や、意図的に曖昧にされている可能性も考えられる。

しかし、そもそもこの箇所では、λόγος が何を指すかを特定することは重要ではない。文脈上、それが「神のことば」の何かしらであることは疑いようがないが、ここで著者が焦点を当てたいのは、その性質 (quality) である。というのも、学者達は注意を向けないが、既述の通り λόγος は無冠詞であり、文法上、λόγος の性質に焦点をあてる「質的用法 (qualitative)」と考えられるからである<sup>35</sup>。実際、

---

質を表していると考えられる。Daniel B. Wallace, *Greek Grammar Beyond the Basics: An Exegetical Syntax of the New Testament* (Grand Rapids: Zondervan, 1996), 79-80.

34 詳しい議論は、Allison, James: 280-85. を参照。アリソンもそれぞれの立場の強みと弱みを挙げるが、どれも決定的ではないと述べる。そして、それぞれの解釈者達の立場は、解釈者自身の手紙全体の理解 (特に 1:1 の宛先の理解) に大きく影響を受けていることを指摘している。

35 ギリシア語は、無冠詞であっても何かを特定の指示する「特定の用法 (definite)」の可能性がある。しかし、この語が特定の用法ではなく質的用法と考えられる理由が少なくとも3つある。(1) この文脈では冠詞の有無が意図的に区別されており、特定の時・時に有冠詞、質的な場合に無冠詞であることが示唆されている。唯一有冠詞の21節では、「すべての汚れやあふれる悪」と対比的に、真に聞くべきことばを受け入れるように促されており、明らかに特定の用法である。他方、無冠詞で用いられる22-23節は、文法上、質的用法とみられる。アポロニウスの規範によれば、一般に「無冠詞名詞+無冠詞属格名詞」の構造では、2つの名詞の意味論上の効力は同じとなる。Wallace, *Greek Grammar Beyond the Basics*, 250-52. そのため、「実行者 (ποιηταί)」と「聞く者 (ἀκροατής)」が質的用法であれば、無冠詞属格 λόγου も質的用法であると考えられる。文脈上、22節は「なりなさい (Γίνεσθε)」という命令法動詞の述語であり、特定の「実行者」よりもむしろ、その性質に焦点がある。23節も「もしある人が…なら」との条件節であるため、特定の「聞く者」よりもむしろ、その性質に焦点がある。そのため、λόγου も質的用法であると結論づけられる。

(2) 新約聖書における、λόγος + 属格 ἀληθείας の他の用例 (全4箇所) を調べると、両方と

著者は「真実 (ἀληθείας)」という性質にもあえて言及している。そのため、著者がここで焦点を当てるのは、「真実」という λόγος の性質である。それが具体的に何を指すか、また、何の出来事に言及しているのかは、この際それほど重要ではない。

では、ここで著者が焦点を当てる「真実」とはいかなる性質だろうか。筆者がここで「真実」と訳したギリシア語 ἀλήθεια は、一般に「誤」「偽」に対する「真」「事実」を意味し、文脈や背景によって大まかに2つの意味合いを持ち得る<sup>36</sup>。ひとつは、抽象的・超時間的な「真理」といった意味合いである。もうひとつは、「忠実性」や「信頼性」を含意する「真実」といった関係的な意味合いである（ただし、日本語の「真実」は「真理」と同様に抽象的な意味合いも持つことがある。そのため、本稿では以後、「真実」は常に「真理」と区別した関係的な意味合いを意図する）。特に旧約聖書との関連では、ἀλήθεια は七十人訳においてヘブライ語 אֱמֻנָה の訳語として頻繁に用いられ、しばしば後者（「真実」）の意味合いでの使用が数多くみられる。ただし、こうした意味合いの区別は単純化されすぎたものであり、実際には、2つの意味合いが重なり合うケースも少なくない。

この ἀλήθεια が λόγος と関連づけられる際も、一般に上の2つの意味合いで

---

も有冠詞で、かつ、それが福音を指すと文脈から明確に分かる場合以外は、質的用法である。有冠詞の用例は3箇所、その内2箇所は明確に「福音」との関連が示唆される（エペ1:13、コロ1:5）。残る1箇所も、文脈上、明らかに福音が念頭に置かれている（Ⅱテモ2:15）。他方、無冠詞で用いられるⅡコリ6:7は事情が異なる。そこでは、著者パウロが神のしもべとして自分を推薦する根拠を列挙しており（Ⅱコリ6:6-7）、神から与えられた「神のしもべ」としての資質が提示されている。「資質」に言及する以上、これらは質的用法と考えられる。そのため、類似するヤコ1:18の無冠詞の用法もまた、質的用法であることが示唆される。

(3) ヤコブの手紙における ἀλήθεια の他の用例はいずれも有冠詞であり、文脈上、特定の教えを指す特定の用法とみられる（3:14、5:19）。そのため、それらとは区別して、あえて無冠詞で用いられる1:18の場合は、不定的用法か質的用法の可能性が高い。このいずれかの場合、文脈上、λόγος の性質に言及していると考えの方が自然であるため、質的用法と考えられる。ἀλήθεια が質的用法である場合、アポロニウスの規範に従えば、λόγος も必然的に質的用法と考えられる。

36 Moisés Silva, ed., *New International Dictionary of New Testament Theology and Exegesis* (Grand Rapids: Zondervan, 2014), 1:222-42.

用いられている。新約聖書全体では、λόγος と ἀλήθεια が関連づけられる箇所が少なくとも8箇所ある。その内の多くが「福音」と関連し、ἀλήθεια を「真理」という抽象的な意味合いで用いている (Ⅱコリ 6:7、エペ 1:13、コロ 1:5、Ⅱテモ 2:15)。「福音」と直接関連しない箇所でも、同様の意味合いの用例はある (ヨハ 17:17、Ⅱコリ 4:2)。他方、ヨハネの手紙第一 3 章 18 節では、ἀλήθεια が「真実」といった関係的な意味合いで用いられている。そこでは、「ことば (λόγος) や舌によって愛する」ことと対比的に「行いと真実 (ἀλήθεια) によって」と述べられる。これは、単に語るだけではなく、その語った λόγος が実行され、実体を伴う真実性が要求されている箇所と考えられる。

七十人訳においても、λόγος と ἀλήθεια が関連づけられる箇所では、同様の 2 つの意味合いが見られる<sup>37</sup>。ただし、意味の区別が難しく、むしろ重なり合っているように見受けられる箇所もある (箴 22:21、伝 12:10)。特に「神のことば」との関連で、それが「真理」であると同時に、実体を伴う「真実」であり、信頼できることが示唆されている。

ヤコブの手紙 1 章 18 節では、上記の 2 つの意味合いの内、主に「真実」といった関係的な意味合いが意図されていると考え、前後の文脈と一致する。既述の通り、16-18 節は、神が徹頭徹尾良いものを与える方をであることを強調している。換言すれば、それは一貫する神の πίστις (「真実」「信頼性」「忠実性」) を強調する内容と言える。また、既述の通り、1 章 22 節では「ことばの実行者となりなさい」(1:22) とあり、19-27 節は全体に「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性が要求さ

---

37 七十人訳に λόγος + 属格 ἀληθείας という表現は全部で 4 回しかない (詩 118:43 [MT 119:43]; 箴 22:21; 伝 12:10; ソロ詩 16:10)。その他に λόγος と ἀλήθεια が関連づけられている箇所はおそらく 1 箇所だけである (申 22:20)。この内、明確に「真実」といった意味合いで用いられているとみられるのは、詩篇 118:43 [MT 119:43] と申 22:20 である。詩篇 118:43 [MT 119:43] では、詩人が神の救いやさばきの実現を期待しながら、神のことば (λόγος) への信頼を表明し、「私の口から真実なことばを (λόγον ἀληθείας) すっかり取り去らないでください」(私訳) と述べている。文脈上、ここでの ἀληθείας は「神のことば」の「実現性」を意味している。申 22:20 も、出来事を描写することば (λόγος) の「事実性」を ἀλήθεια で表現しおり、「真実」という意味合いが読み取られる。残りの 3 箇所は、本文で触れるように、「真理」と「真実」の意味合いの区別が難しい。

れている。それは、*λόγος* が常に「真実」であり、実体を伴う真実性を持つべきとの教えと言い換えることができる。

それゆえ、18節の「(神が) 私達を真実なことばによって生んだ」は、19-27節の「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性を要求する教えの土台となっていると考えられる。著者は、神のことばの「真実」を強調しつつ、その性質を起源に持つ者としての、「ことば」に対する本来のあり方を説いていると言える<sup>38</sup>。

次項では、この点をより明確にするために、19-27節の言及を具体的にとり挙げながら、それらが実際にことばの「真実」といった性質とどのように関連しているのかを示すこととしたい。

## 6 「聞くこと」「語ること」「行うこと」と「真実」

### (1) 「聞くこと」に関する教え：「真実なことば」の享受

18節を土台にしつつ最初に語られるのは、「聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい」(19節)である。ここでの「聞く」は、必ずしも「神のことば」を聞くこととは限らない。なぜなら、並行して扱われる「怒り」の主題は、人間同士の交わりを念頭においているとみられ(3:1-4:12 参照)、文脈上、19節全体が交わりにおける他者への態度を問題としていえると考えられるからである。しかし、交わりに限定する必要もない<sup>39</sup>。というのも、直後の21節では明らかに「神のことば」に聞くことが命令されるからである。

21節    ですから、すべての汚れとはびこる悪とを捨て去り、あなたがたのたましいを救うことのできる、その植え付けられたことばを素直に受け入れなさい。(私訳)

ここには、「すべての汚れとはびこる悪」と対比して「その植え付けられたこと

38 著者が「ある種の被造物の初穂とするため」と述べて、人間(あるいは信者)だけに与えられた特別な役割に注意を向けていることにも注目すべきである。辻、前掲書、79頁

39 Scot McKnight, *The Letter of James*, The New International Commentary on the New Testament (Grand Rapids, Michigan and Cambridge, U.K.: Eerdmans, 2011), 137.



ばを (τόν ἔμφυτον λόγον τόν δυνάμενον)」受け入れよとの命令がある。有冠詞の λόγος は、文脈上、「神のことば」を指し、その「性質」というよりもむしろ、具体的な教えが念頭にありと考えられる。しかしながら、「あなたがたのたましいを救うことのできる」と説明されており、その「信頼性」も強調されている。これは、18 節で述べられていた「神のことば」の「真実」という性質と重なる。すなわち著者は、神が真実なことばによって生んだ者として、真実なことばである神の教えを素直に受け入れるようにと命令している。

21 節の解釈上の課題は、新約聖書で 1 度しか用いられない形容詞 ἔμφυτος が λόγος に付されていることである。この語は「植え付けられた」という意味の他に、「生まれつき」といった意味がある。前者の場合、λόγος は福音等の後から聞いた「ことば」を示唆するが、後者の場合、人間に元来与えられている何かしらの「ことば」を示唆する<sup>40</sup>。しかし、この形容詞が表現するのは、そうした時間的な前後関係よりも、むしろ、人間に対する「神のことば」の永続性や重大性である。七十人訳で ἔμφυτος は、ソロモンの知恵 12 章 10 節でのみ用いられている。そこには、「彼らの悪 (κακία) は植え付けられたもの (生まれつきのもの)」とあり、同節の「彼らの考えが永遠に変わらない」と並行している。そこでは、人間に対する悪の永続性や重大性が強調されている。

ヤコブの手紙でも、著者はこれと近い語彙を用いて「悪 (κακίας)」と「植え付けられた (生まれつきの) ことば」を対比している<sup>41</sup>。つまり、ソロモンの知恵が ἔμφυτος を用いて、人間に対する悪の永続性や重大性を形容するのに対し、ヤコブの手紙は ἔμφυτος を用いて、「悪」をも凌駕する、人間に対する「神のことば」の永続性や重大性を形容する。これは、1 章 18 節の「(神が) 私達を真実なことばによって生んだ」との言及を意識させる。著者は、自分達が真実なことばによって生み出された者であるがゆえに、自分達に対する「神のことば」の永続性や重大性

---

40 そのため、ストア派のいう「ロゴス (理性)」と解する見解もある。しかし、そのようなストア派の意味合いを持ち込むことはあまりに唐突であり、説得力がない。また、「生まれつき」のものを「受け入れなさい」と命令するのが不自然だとの指摘もある。Peter H. Davids, *The Epistle of James: A Commentary on the Greek Text*, The New International Greek Testament Commentary (Grand Rapids: Eerdmans, 1982), 95.

41 Luke L. Cheung, *The Genre, Composition and Hermeneutics of the Epistle of James* (Carlisle: Paternoster, 2003), 90.



を強調し、その享受を促している。

## (2) 「語ること」に関する教え：口を慎むこと

19節で語られる3つの命令の内、後半の2つは「語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい」である。「語ること」と「怒ること」は共通して「遅くある」ことが命令されるため、密接に関連している。おそらくここでは、怒りにまかせてふさわしくない言動をする人間が意識されていて(3:1-4:12参照)、著者はそのような者達に対し、口を慎むことを要求していると考えられる。

20節には「なぜなら、人の怒りは神の義を実現しないからです」(私訳)とあるが、ここでの「神の義」の意味合いにはいくつかの可能性がある。これについては、マクナイトの区分が良く整理されている<sup>42</sup>。(1) 神自身の義で、(a) 倫理的な義か、(b) 救いをもたらす行動を意味する。(2) 人間に与えられる神の義で、(c) 立場としての意味合いか、(d) 救済によって生じる倫理的行動の特性を意味する。どの立場にも一定の根拠があるため、学者達の意見は分かれる<sup>43</sup>。

この場合、同様の主題が手紙の主要部(2章以下)でどのように展開されているのかに注目することは理解の助けになる。ヤコブの手紙で「義(δικαιοσύνη)」という語は、他に2回しか用いられない。ひとつは、アブラハムに言及して創世記15章6節を引用する2章23節であるが、主に信仰と「行ふこと」との関連を述べるその文脈の主題は、1章20節の主題とは重ならない。他方、もうひとつの3章18節は、直前に「語ること」について述べる点や(3:1-12)、人間同士の妬みや争

42 McKnight, *The Letter of James*, 138.

43 例えば、ἐργάζομαι δικαιοσύνην という表現が通常、倫理的行動を示唆するとして、(d) の立場が主張されることがある。Chris A. Vlachos, *James*, Exegetical Guide to the Greek New Testament (Nashville: B&H Academic, 2013), 54. 辻、前掲書、85頁。しかし、近年、この箇所の本文は οὐκ ἐργάζεται よりも οὐ κατεργάζεται が有力と考えられるようになったため、この立場は疑わしくなった。これは、ネストレ・アーラント28版から CBGM という新しい方法論が用いられたことによる。CBGM については、前川裕「本文批評」(浅野淳博、他『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団、2016年)、38頁を参照。複合動詞 κατεργάζομαι は「実現する」「達成する」等の意味を持つが、これらは ἐργάζομαι にも含まれる意味合いであり、意味自体にはそれほど大きな違いはない。Louw and Nida, *Lexical Semantics of the Greek New Testament*, 804.

いが取り扱われる点で (3:13-4:12)、1 章 20 節全体との主題的な重なりがある。そのため、この 2 つの箇所において「義」の概念が重なっている可能性は高いと考えられる。

3 章 14-17 節では、ねたみや利己的な思いが「地上の知恵」と批判され、反対に「上からの知恵」として「純粹さ、平和的であること、寛容さ、従順さ、あわれみと良い実」に満ちていること、公平であり、偽善でないこと」(私訳) が挙げられる。この流れの中、18 節で「義の実は、平和を作る人たちによって、平和のうちに蒔かれる」(私訳) と述べられる。そのため、「義」とは神がもたらす倫理的な義を意味し、平和が実現している状態であると考えられる。この箇所との主題的な重なりを考慮すれば、1 章 20 節の「神の義」も、(a) の「倫理的な義」の意味合いと考えるのが妥当である。

つまり、1 章 20 節は、人の怒りが神の倫理的な義としての平和の状態を実現するものではないと述べている。一見、この主題は 18 節の「真実なことばによって生んだ」との言及とは無関係に思われる。しかし、口を慎むことは、以下の (4) で述べるような、自らの「語ることば」が「真実」となるための場を適切に整えるものであると言える。そのような意味で、口を慎むことは、(4) の消極的な表現と考えることができる。

### (3) 「聞くこと」「行うこと」に関する教え：「神のことば」が「真実」であるべきこと

22 節は冒頭に「ことばの実行者となりなさい」とある。そこには既述の通り、「神のことば」の実行者となるべきことと同時に、「語ることば」の実行者となるべきことが含意されていると考えられる。しかし、22 節後半から 25 節にかけて述べられるのは、主に前者である。

22 節      ことばの実行者でありなさい。自分自身を欺く、ただ聞く者ではいけません。(私訳)

「神のことば」が実行されるべきことについては、23-25 節で詳しく述べられる。そこでは、「鏡を眺める人」のたとえが用いられ、実行を伴わないことがいかに愚

かなことかが示されている<sup>44</sup>。

たとえにおける τὸ πρόσωπον τῆς γενέσεως αὐτοῦ (新改訳2017「生まれつきの顔」)が何を意図する表現なのかは、解釈者達を悩ます課題である。そこで用いられるギリシア語 γένεσις は「誕生」や「系図」を意味し、福音書ではイエスの降誕との関連で用いられる (マタ 1:1, 18; ルカ 1:14)。福音書以外ではヤコブの手紙で2度用いられるのみであり (1:23, 36)、新約聖書では比較的稀な語である。ただし、この語が元来「起源」に関連していることに注目すれば<sup>45</sup>、18節の「真実なことばによって生んだ」という表現と結びつける意図でこの語を用いていると考えるのが妥当である (筆者はこれを意識しつつ、本稿の私訳では「出生の顔」と訳した)<sup>46</sup>。著者の問題意識は、神が「真実なことばによって生んだ」者が、その本来のあり方を忘れ、ことばの「真実」を失っている状態に向けられている。換言すれ

44 このたとえにおける「すぐに忘れる」(1:24)が、人間の常として描かれているのか、愚かな行為の例として描かれているのか、解釈者によって意見は分かれる。双方に決め手に欠けるため、おそらくは、ボウカムが注意深く述べるように、その両面が含まれていると考えるのが妥当である。Bauckham, James, 52.

45 W. A. Bauer, *Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3rd rev. ed., ed. F. W. Danker (Chicago: University of Chicago, 2000), 192. Silva, ed., *New International Dictionary of New Testament Theology and Exegesis*, 1:569.

46 辻は、γένεσις と 18 節を結びつける解釈の可能性に触れながらも、この短い表現からそこまでの内容を読み取るのはかなり難しいと言わざるを得ないと述べている (辻、前掲書、91-92 頁)。確かに単語だけで判断するのは困難であるが、19 節以下の文脈で一貫して 18 節の言及が意識されていると考えるならば、γένεσις と 18 節の結びつきは、むしろ明確である。そして、それはこの比較的稀な語を用いた理由として最も説得力の高い説明である。

ちなみに、ヤコブの手紙の 3:6 は「(舌は) 誕生の車輪を燃やす (ὀγιζοῦσα τὸν τροχὸν τῆς γενέσεως)」とある。「車輪 (τροχός)」は新約聖書で1度しか用いられないが、おそらくは「人生」を象徴する表現であると考えられる (辻、前掲書、160 頁)。続く 3:7-8 は明らかに創造物語を意識した言及であり、3:9 「神のかたちとして造られた者達を (τοὺς καθ' ὁμοίωσιν θεοῦ γεγονότας)」は人間の起源に関する言及である。それらは、本来のあり方から乖離した現実を描き出している。それゆえ、3:6 の γένεσις は、1:23 との関連性は不確かであるものの、人間の本来のあり方を示唆する表現であり、1:23 と同様に、それが失われている現実に関及するために用いられている。

ば、著者はここで、「神のことば」を空しくし、実体のないものとしてしまう者の愚かさを述べている。

22 節の「自分自身を欺く (παραλογιζόμενοι ἑαυτούς)」といった表現も、そのような、神が「真実なことばによって生んだ」者としての本来のあり方との「ずれ」を強調する表現である。「ただ聞く者」は、聞いたことばと実際の行いとが一致しないために、自分自身を欺くことになる。そのような「聞くこと」と「行うこと」の不一致は、「神のことば」の「真実」に反する生き方である。

#### (4) 「語ること」「行うこと」に関する教え：「語ることば」が「真実」であるべきこと

既述の通り、人のことばが真実であるべきことは、「ことばの実行者でありなさい」(22 節)の中に含意されている。しかし、よりはっきりと語られるのは 26 節である。

26 節    もし、宗教的であると考える人が、自分の舌を制御せず、むしろ自分の心を欺いているなら、この人の宗教はむなしい。(私訳)

この箇所 で用いられる形容詞 *θηρσκός* は、「宗教心にあつい」(新改訳 2017)、「信心深い」(新共同訳) 等と訳されるように、しばしば内面的に解される。しかし、この語自体は内面よりもむしろ、宗教的な教えの実践に関する忠実さを指す<sup>47</sup>。そのため、「宗教的であると考える人」とは、健全な宗教生活を実践できていると自負する人を指す。しかし、著者は、舌を制御していなければ、その人の宗教は虚しいと述べる。これは言うなれば、信じて行っていることと「語ること」の間に乖離がある状態への警告である。そのような乖離は、「自分の心を欺いている (*ἀπατῶν καρδίαν αὐτοῦ*)」と表現され、22 節の「自分自身を欺く (*παραλογιζόμενοι ἑαυτούς*)」と類似している。22 節では、それが「聞くこと」と「行うこと」の不一致を表していたのと同様に、26 節では「行うこと」と「語ること」の不一致が表されていると考えられる。このような、舌を制御しない者の「語ること」「行うこと」の不一致は、神が「真実なことばによって生んだ」者の本来のあり方とは異なるものである。求められる本来のあり方は、「聞くこと」「語ること」「行うこと」が一貫し、ことばが常に「真実」となる生き方である。続く 27 節では、行いを伴

47 Louw and Nida, *Lexical Semantics of the Greek New Testament*, 532.

う生き方の具体例が著者によって示されている<sup>48</sup>。

既に述べたように、聞いた教えに基づいて適切に語り、行うべきとの教えは、続く2章以下（手紙の主要部）でも継続して扱われる。そのような、「語ることば」に常に真実性を要求する命令は、直後の文脈だけでなく、手紙における「語ること」に関する最後の言及の中に最もはっきりと表されている。それは、5章12節の誓いの禁止である<sup>49</sup>。誓いの禁止については、当時、誓いの表現について様々な角度から神名を巡る議論があったことを背景にして、神名を汚さないことに神経質であった当時のユダヤ人の見解が念頭にありと思われる<sup>50</sup>。著者はそこで、そのような神名を巡る議論以上に重要なこととして、普段の生活において自身のことばに誠実であるべきだとの新たな価値観を提示している。これは換言すれば、自分自身のことばが常に「真実」であるようにとの教えである。

## 小結

以上、(1) から (4) で示したように、1章19-27節には、「聞くこと」「語ること」「行うこと」といった主題がみられ、それらはひとえに、18節「(神が) 私達を真実なことばによって生んだ」との事実を根拠に展開されている。特に著者は、「神のことば」の「真実」という性質を強調しながら、本来のあり方として「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性を要求し、聞くにも語るにも、ことばが「真実」であることを求めている。

また、以上のような思想は、既に各項で折々に触れたように、2章以下の手紙の主要部においてさまざまなかたちで展開されている。主要部における教えのすべてが、本稿で示したような「聞くこと」「語ること」「行うこと」の一貫性の要求や、

48 ただし、27節は(3)の「聞くこと」「行うこと」の一貫性への問題意識も反映されている。

49 5:12の冒頭に「なによりもまず(Πρὸ πάντων)」とあるが、直前の文脈との関連はあまりはっきりしない。そのため、より広い文脈を意識している可能性が示唆される。特に、この言及は「語ること」に直接触れる最後の言及であるため、「語ること」に関する教えの結論と捉える見方もある。Bauckham, *James*, 93.

50 伊藤明生「『誓ってはならない』—第三戒とマタイ福音書」(『EXEGETICA』第23号、2012年、15-37頁)、35頁

ことばの真実性の要求に還元できるとは言い切れない。しかしながら、本稿で示した思想は、手紙に一貫する全体的な思想のひとつであることは確かである。

## 結論

1章の導入部において、著者は手紙の主要部で展開される主題を先取りして提示している。ただし、導入部の構造の複雑さから、主題相互の関係性や全体的思想は不明瞭と考えられてきた。しかし、導入部の「聞くこと」「語ること」「行うこと」について説く文脈で λόγος が集中的に用いられていることに注目すると、そこで強調されているのが、λόγος の「真実 (ἀλήθεια)」という性質であることがみえてくる。著者は1章18節の「(神が) 私達を真実なことばによって生んだ」との言及を土台に、聞くにも語るにも「ことば」が実体を伴う真実性を持つことを要求している。換言すれば、「聞くこと」「語ること」「行うこと」が一貫したものであることの要求であり、それは手紙に一貫する全体的な思想となっている。

## 今後の課題

最後に、イエス伝承の提示の仕方に関して、本稿の結論が示唆する点について簡潔に述べたい。第一に、ヤコブの手紙の著者がイエスとの関連を明言せずにイエス伝承を提示する点については、著者がイエス伝承を自分自身の「真実なことば」として語り、提示するよう努めた結果として認識され得る。そして、それは「聞くこと」「語ること」「行うこと」において一貫性をもって生きようとする著者自身の思想の表れとして捉えることが可能である。福音書との言葉上の一致が比較的少ない点についても、自分自身の「真実なことば」として語った結果として認識され得る。

第二に、以上のような提示の仕方に関する説明は、ボウカムやクロッペンボーグの主張する著者の「創造性」と矛盾するものではない。そればかりか、著者がそのような提示の仕方を用いた積極的な理由を説明し得る点で、先行研究にはない示唆を与えるものである。また、知恵文学やヘレニズムの修辞学からではなく、手紙自体に表された著者の思想から説明をする点において、より信頼性の高い説明と言える。

第三に、これらは、ヤコブの手紙とイエス伝承との関連性がより広い範囲で認められる可能性を示唆している。換言すれば、ヤコブの手紙におけるイエスの教えの

思想的影響が、より大きい可能性を示唆している。

以上の3点を論証するためには、ヤコブの手紙におけるイエス伝承の「提示の仕方」についてのより詳細な分析が必要であり、それは今後の課題である。